

ゴサイクンドトレッキングとスリヤピーク登頂

(2016年10月30日～11月3日)

(今回の目的)

ネパールは昨年5月に大地震に見舞われたことは記憶に新しいが、自分にとっては登山などで何度も訪れた土地であり他人事には思えなかったものの、国内の被災地のように気軽にボランティアに行くわけにもいかず、当座は義援金の支援をするだけであった。観光が主要産業であるネパールにとっては観光等で大勢の人が訪れて現地にお金を落とすことが最も復興に役立つことになるので、早いうちに訪問したいと思ってはいたが、どうせ訪問するならば震源地に近く、大きな被害を受けたランタン地区に行くことが復興という観点からはふさわしいのではないかと思えた。ランタンを選んだのにはもうひとつ訳がある。ネパールのトレッキングとしては、エベレストやアンナプルナ周辺が一般的であるが、いずれも訪れたことがあるのに対して、ランタンはまだ訪れた事がなく、昔、イギリス人の登山家ティルマンが「世界中で一番美しい谷」として紹介したこともあって、以前から行きたいと思っていた地だからでもある。ただエベレスト方面が比較的早く復旧したのに対してランタン方面の復旧は遅く、今秋になってようやく倒壊したロッジの再建が行われて、以前と同様にトレッキングができるようになったということを知り、早速トレッキングに出かけることにした。ロッジが再建されたのであるから、あえて現地のガイドを頼むまでもなかったが、自分の年齢を考えただけでなく、ガイドやポーターを雇えば現地に「金を落とす」ことにもなるので、「大名旅行」をすることにした。さらにトレッキングのアレンジをする旅行社も日本社ではなく、現地の会社を利用することにしたのは同じ趣旨からである。

(トレッキング出発点まで)

今回はドーハ経由ということで長時間飛行の末にネパールに向かう。カトマンズに近づいてくると雲の上にヒマラヤの峰々が見えてくるのだが、残念ながら私の席の窓は反対側だったのでヒマラヤの展望は得られなかった。そのうちに空港の上で旋回を始めたので、こちら側の窓からでも見えるかなと期待したが、高度が下がり過ぎたために見えるのは低い山ばかりで高い山は雲に隠れて望むことはできなかった。まあトレッキングになればいくらかでも見られるのだから、よしとしよう。空港からエージェントの車でホテルまで連れて行ってもらいトレッキングの手続きをしてから街に出る。繁華街のターメは賑わっていて地震の影響は全く感じられない。観光客は欧米人が中心であり、たまに見かける東洋人もほとんどが中国人のようで日本人の姿は全く見られない。適当な所で引き返してレストランで夕食をとる。明日からはしばらく肉が食べられないだろうから、普段はあまり食べないステーキを食べる。さあ明日からは野菜カレーが続くぞ！

ドゥンチェへの出発の朝は予定よりも早く目覚めてしまう。準備万端をして出たつもりだったが、思わぬところでヘマをしてしまった。ガイドとホテルで落ち合い、バスの発着場に着いた時にポシェットのサイドのポケットにしまってあるはずのカメラがないのに気づいた。反対側のポケットに入れてある携帯は落下防止のためにヒモがついているのだが、カメラの方にはつけてなかったのと、ポケットのジッパーがしまってなかったにもかかわらず、貴重品が入っているということで(本当の貴重品は胴巻に入れて寝ている間も身につけているのだが)、枕元に置いておいたために、夜中にベッドの下に落ちたのかもしれない。ガイドに話して、発着場まで送ってくれたエージェントの人にホテルまで見に行ってもらったのだが、見当たらないという。タブレットでも写真は取れるのだから仕方ないか

とんだアクシデントの中の出発となってしまったが、行程自体は特に問題なく進行していく。ネパールでの長距離路線バスは3年前にインドのストックカンリ登山の後に仏跡を訪ねてインドからネパールを旅した時に随分と利用したが、1人で乗っていると、バスが本当に目的地に向かっていているのか(車前方の行先表示はネパール文字で読めない)、休憩等でバスから降りた時に目を離した隙にバスが発車してしまうのではないかと心配は絶えないが、ガイドと一緒にだと安心である。昼前に途中の大きな町であるトリスリで昼食をとる。もちろんお決まりのダルバートである。香辛料入りの野菜の煮物と豆(ダルという)入りのスープのついたライスで、今日はさほど奥地ではないのでチキンの皿も出てきたが、山中になれば期待できないだろう。ダルバートも嫌いな味ではないが、毎日続くとうどうだろうか？

ここまでも随分とアップダウンがあったが、高度はカトマンズと大差はない。しかし、ここからしばらく行くと、山の斜面をぐいぐい上がっていき、1500メートル近くも高度を稼ぐ。道は片側が谷底まで切れ落ちていて、悪い路肩を乗り越えてしまえば、途中で遮るものはない。8年前のカラコルムハイウェイも悪かったが、こちらは振動の激しいガタガタ道なので、さらに悪く感じる。なんとか悪路を乗り越えて遠くに氷雪をまとった山が見えてくるとゴサイクンド方面のトレッキング出発点であるドゥンチェも近い。町の入口にはチェックポストがあり、簡単な荷物検査を受ける。泊まるホテルは町の真ん中にあり、ロッジと言った方があっているが、眺めだけは素晴らしい。先ほど見えたピークはランタンリルンという7千メートル峰でランタン山群の最高峰のようである。ドゥンチェから見えるとは思わなかったので儲けもののような気がしたが、ゴサイクンドへのトレッキング道に入るとしばらくは前山に遮られて見えなくなるようなので、眺められてラッキーであった。

(トレッキング1日目)

標高2000メートル弱のドゥンチェから標高3300メートルのシンゴンパまで標高差1300メートル余りを6時間かけてゆっくりと登っていく。パーティー編成は私の他に

ガイドとポーターの3人である。二人ともカトマンズから同行している。ポーターはできれば現地雇用した方が、復興に寄与できるのではないかと思ったのだが、まあカトマンズからでもネパール復興に多少なりとも寄与するだろうから、いいことにしよう。倒壊しているロッジは見かけられず、道も歩きやすく地震の爪痕は全く感じられない。トレッカーも結構入っているが、日本人には1人も会わない。日本人の習性として人気の高いエベレスト方面に集中してしまうのと、地震被害の報道が足を引っ張っているためだろうか

シンゴンパには昼過ぎに着いたが、前山に遮られてヒマラヤの展望は得られない。ロッジでの食事は予想したようなタルカリとダルバートではなく、西洋料理のメニューが豊富に揃っていて（といっても凝ったものはないが）、30年以上前にトレッキングした時とは大違いである（最近はコック付きの登山ばかりだったので）。夕食までの自由時間は景色も見飽きたことでもあるので個室に閉じこもり、明日からは富士山よりも高い標高での生活が続いて禁酒を余儀なくされるので、ダウンチェから持参したウィスキーの小瓶を空けて最後の酒を楽しんだ。集会場で他のトレッカーと交流すればよいのだが、日本人はいないし欧米人と英語でコミュニケーションするのは疲れるのである。こういう時には、もう少し英会話を勉強してよけばよかったなと反省もする。

食堂での夕食後に別棟の個室に戻るために外に出ると満天の星空である。外気も相当冷え込んでおり、高所用の羽毛服を持ってきたのは正解であった。

（トレッキング2日目）

今日はラウレビナまでの標高差600メートル余りの短い行程である。時間的にはゴサイクンドまで十分に行けるのであるが、高度を上げすぎると高山病になりやすいので、そのような計画になったようである。だが体調は良好で順調に高度を稼ぎ、途中でランタンリルンが真正面に見えてきてまもなくすると、目的地のラウルビナになんと10時半についてしまったので。明日の予定であったゴサイクンドまで一気にいくことになってしまった。

ゴサイクンドに向かう前にロッジで昼食をとる。カレーが続く予想が肩透かしにあったので、今回はあえてカレーを注文する。カレーは行きのバスの途中で食べて以来であるが、主峰のランタンリルンは小屋の陰で見えないものの、ガネッシュヒマールの峰々の大展望を楽しみながら食べるカレーはなかなかのものである。ロッジの昼食の準備がもたついて、昼食が終わって出発するまでロッジ前に2時間近くも滞在したことになる。ゴサイクンドまでは3時間ちょっとかかるということだったが、休み休み行ったにもかかわらず、2時間ちょっとで着いてしまった。山々に囲まれた大きな湖の畔に数件のロッジが立ち並ぶ別天地である。



(トレッキング3日目)

朝6時にロッジを出発する。もうワンパーティーがスリヤピークに向かうとのことで、前後して登っていく。湖の先にも大小いくつかの池があり、道はその脇を通って登っていく。スリヤピークの登路は事前に読んだ登頂記録では湖から別れてすぐに尾根を目指す一般路と峠まで登ってから岩尾根に取り付くアルパインルートがあるとのことであったが、ガイドと別のパーティーはともに峠の方に向かって行く。今さらアルパインルートに登る気もなかったなので、一般路を行きたいと思ったが、岩尾根を登らずにガレ場を登って頂上直下に出るルートを行くとのことなので、それに従うことにした。

ガレ場なので多少は神経を使うが、それほど崩れやすいこともなく、適度な緊張感をもって登ることができた。さすがに5千メートル近くになると、少し頭がボワーとしたが、下界とさほど変わらないペースで登れて丁度4時間で登頂したことになる。



頂上からは正面にはランタンリルン、西にはガネッシュヒマール、さらにはマナスルと大展望が広がる。今回、ゴサイクンドのコースとそれより北方のランタン谷のコースはいずれにしようか迷ったが、日程の面やコースの面白さからゴサイクンドにして正解であった。ランタン谷からの方が、主峰のランタンリルンは間近に見えるだろうが、近ければよいというものではなく、全体の眺望はゴサイクンドコースの方が上であると信じたいし、湖や池の美しさはゴサイクンドコースが勝っていると断言したい。

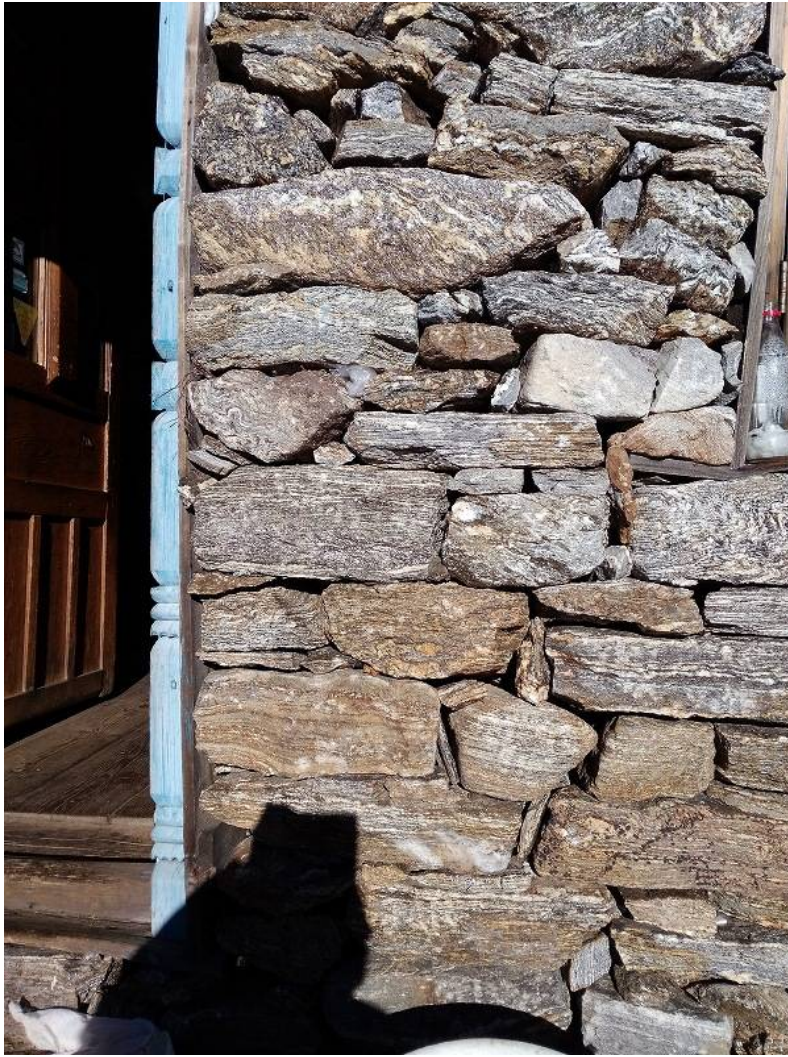


下山は一般路を降りたが、ガレ場とまでは言えないにしても岩だらけでハイキングコースよりも悪い道である。登頂記録にも一般路は遠回りであるとして書いてあったが、ロッジまで3時間40分かかり、登りと大差ないものであった。ロッジに到着するとガイドたちとビールで乾杯して登頂成功を祝った。

（トレッキング4日目）

行程的には今日中にダウンチェまで降りることも十分に可能なのだが、そんなに早くついても、カトマンズで暇をもて余すだけなので、当初の予定通りシンゴンパ止まりとし、カトマンズへは1日早い到着として観光に当てることとした。帰りは行きと同じコースを通るので、記録として新たに書くことは少ないが、今回の目的の一つである震災復興に関することを中心に書いていきたい。

事前の情報ではランタン方面は壊滅状態で、この秋からロッジも復旧されてトレッカーの受け入れが始まったということであったが、今までは地震の爪跡を感じることはなかった。ゴサイクンドで泊まった写真のロッジも一見したところは以前からのロッジがそのままあるように見えるが、近くから見ると倒壊を免れてそのまま残っている石積みと新たに積んだ石の境が色の違いではっきりとわかった。日本のように柱を使う場合には上部半分だけ壊れるということはないが、石積みの場合には普通のように、少し下ったあたりでも、上部の石積みだけがこわれたままで再建されないままの建物が見られた。



マナスルやアンナプルナは行きの時は振り返らないと見られなかったが、帰りは正面に見ることができて楽しい。マナスルは昔アンナプルナ周遊の際に眺めているはずなのだが、記憶がはっきりしないため、今回初めて見たことにしておこう。8千メートルは全部で14座あるが、そのうち登ったのは1座、間近に眺めたのは12座となる。そのうち、アンナプルナは連山となっていて特定が困難なので、内院にトレッキングして間近に見てみたいし、ナンガバルバットも飛行機から間近に眺めたことはあるが、地上から仰ぎ見てみたい。残りの2座も機会があれば見てみたい。

シンゴンパまでは休み休み歩いても3時前には着いた。ここまで来れば、ゴールのドンチェは目と鼻の距離だし、高度も3300メートルまで下がって高山病の心配もないので、地元の酒(どぶろくの1種のチャンや蒸留酒であるロキシーが有名)で酒盛りでもしようかと思ったらロッジにはビールや洋酒しか置いてないという。6年前にクスムカングルに登りに行った時は、途中の小屋(ロッジではない)で飲めたんだけど、そこはあまりトレッカーが行く場所ではなかったので昔ながらの生活が残っていたのに対して、トレッカーで賑わっている場所は食事や酒も西洋人好みのものになってしまったのだろうか。

(帰途)

トレッキング最終日はドンチェには午前中に着いてしまったが、カトマンズ行きのバスは朝しかないなので記録の整理等で時間を潰して、翌朝のバスでカトマンズに向かう。バスは概ね順調に走行したが、カトマンズ市内に入る前の峠で渋滞につかまってしまう。ただ峠付近からはヒマラヤの素晴らしい展望が眺められたので退屈することはなかった。峠を越えてヒマラヤに別れを告げると、後は雑踏のカトマンズに戻るだけであつた。

今回はカトマンズに一日早く戻れたので、カトマンズ市内をあちこち観光したが、地震の爪痕は全く感じられなかった。ただ隣接する古都パタンまで足を延ばしたところ寺院の一部が修復中で、地震の大きさが垣間見られた。



(お願い)

今回、私の拙文を読んでいた方をお願いしたいことは、ネパールの観光やトレッキングを楽しむに際しての地震の影響は現在では全くないので、安心してネパールを訪れていただきたいということです。経済的な面や生活レベルといった旅行者ではわからない面では様々な地震の影響はまだあるでしょうが、そういった問題を克服するためにも、多くの人々がネパールを訪れることが望まれます。なんと言ってもネパールにとって観光は大きな産業であり、観光が栄えることがネパール復興の大きな後押しになるのですから

